

## 運慶作大威徳明王像をめぐる二、三の問題

—鎌倉幕府関係の造仏と靈驗仏信仰との関わりを中心に—

瀬谷貴之（神奈川県立金沢文庫）

平成十九年春に神奈川県立金沢文庫の保存修理事業で運慶作と判明した称名寺光明院所蔵の大威徳明王像については、わずか5件しか確認されていなかった銘文から運慶作と判明する彫刻作品の約五十年ぶりの発見として、多くの注目を集めたことは記憶に新しい。また大威徳明王像は建保四年（1216）十一月、源実朝の養育係を勤めた将軍家後宮の重要人物であった大弐局の発願により、大日如来・愛染明王・大威徳明王の三軀のうち一軀として造立されたものである。本発表では本像の鎌倉時代の彫刻史における位置づけについて、運慶と鎌倉幕府との関係や、近年発表者が注目する運慶と靈驗仏信仰との関わりから論じてみたい。

はじめに運慶と鎌倉幕府の関係を、今回発見された大威徳明王像の新しい事例も含めて、文治二年（1186）北条時政発願の願成就院諸像の造像から、承久元年（1219）北条政子発願の源実朝供養のための勝長寿院五仏堂五大尊像の造像まで再検討する。そして、その関係が、前半期（文治～建久年間）は広く御家人上層部の造仏活動に従事しているのに対し、しばらくの期間を置いた後、後半期（建保から承久年間）はより限られた将軍家周辺の身内の人々のための造仏に従事していることを明らかにする。そして、ここに運慶の社会的地位の上昇などによるとみられる造仏活動の転換期があることを改めて指摘する。なお、この運慶と鎌倉幕府の関係、特に前半期における幕府の運慶を含めた南都仏師（慶派仏師）の重用の理由については、かつて様々に論じられてきたが、ここでは北条氏主導により南都との地縁・血縁により、それが採用されたという新たな見解を提示したい。

そして次に運慶と靈驗仏信仰について検討する。まず、運慶が東大寺や興福寺を中心とした南都復興において靈驗仏とも言える古像の復興に従事したことを指摘する。さらにまた、靈驗仏信仰と運慶の関係で最も見逃せない事績が、建久七年から同九年に文覚上人主導で行われた、仏舍利出現の事件（靈驗）をともなう東寺講堂諸尊像の修理活動と、神護寺と東寺の中門における、南都第一の靈驗仏ともいべき元興寺中門二天王像の模刻であることを明らかにする。すなわち、この修理・造像以後、運慶は「靈驗仏師」としての地位を確固たるものとした。それが以後の造仏活動に強く影響して、先に指摘したように運慶と鎌倉幕府の関係を前半と後半で大別する契機になった一つの要因であった可能性が高い。後半期の造仏で将軍家周辺の身内の人々が、運慶による造仏に求めたのは靈驗の付与であったのである。本発表では、その靈驗から東国の造仏活動に広く影響を与えた、建保六年の北条義時発願の大倉薬師堂造仏について言及しつつ、称名寺光明院の大威徳明王像も運慶と靈驗仏信仰、特に東寺講堂諸尊像修理との関係から改めて位置づけようと思う。